ー Link “新風”

Vol.57
通算 第150号

もうすぐ七五三。子供の成長を祝い、これからの元気をお祈りする行事。
一生のうちこの様な人生の節目にお祝いをするということが何度かあります。
家族や身近な人のことを改めて考えてみる良い機会なのでいつまでも
大切にしていきたいですね。

『 秋の気配 』

『今月の表紙』

美しい紅葉の条件は四つあると言われています。
「昼夜の温度差」、「清涼な空気」、「日光」、「空気中の水分」。
『歴史と季節の国』日本にぴったりの条件ですね。
秋はまた「人恋しい季節」でもあります。
数年前に社内旅行で訪れた京都で、偶然にも遭遇したカップルと真っ赤なもみじ。
二人が何を語り合っていたのかは分かりませんが、きっと二人手を携えて様々な困難を乗り越え、
人生の美しい紅葉を迎えるのだと予感しました。

撮影日時 ： 2008年12月7日　　撮影者 ： 営業開発室　荻田室長

上海へ飛ぶ

10月14日、粉体工業展大阪2013のざわめき覚めやらぬうちに、5年ぶり上海へ飛ぶ。相変わらず飛行機の発着は苦手で、命が少しながら縮む思いだ。かつて、羽田から熊本に向かう機中で隣席の年老いた女性が合掌している様を見て、安堵したことを思い出す。

上海浦東国際空港に到着後、タクシーで上海市静安区にあるホテル・上海吉臣酒店へ移動。今回の訪中は、日本粉体工業技術協会（以下、粉技協）の粉体ハンドリング分科会が主催する、中国国際粉体工業展（IPB 2013）と粉体関連企業視察ツアー、および上海で開催の粉体ハンドリング分科会への参加が目的である。併せてこのチャンスに、私の友人である沼津在住の謝寧氏の故郷・瀋陽にも足を伸ばすことにした。

14日夕方、視察団の団結式には大川原武協会会長を初め30名ほど参集し、名刺交換や情報交換を通して親睦を深めた。中でも目立った方々は、経営者の子息たちである。徳寿工作所、大河原化工機、槙野産業、ヨシカワ、粉研パウテックスといった企業の面々で、将来を担う若い世代でとても頼もしく思えたのは私だけではあるまい。同時に、自分の若い時とダブらせ、自分はどうだったのかと自問せずにはいられなかった。

翌15日の午前中は、上海国际展览中心で開催している上海粉体工業展の見学。企業、団体など129ブースが出展。粉技協も、日本企業のポスター展示するジャパンパビリオンなるブースを確保した。その企業は、大川原製作所、晃栄産業、タナベ、中央化工機、ツカサ工業、東京スクリーン、東和制電工業、徳寿工作所、前川工業所、マツボー、CPI Business Tipの11社。また、機械出展は、大川原化工機（上海）、三興商事（上海）、堀場（中国）貿易、カワタ（上海）、島津（中国）、ホソカワミクロン（上海）であった。5年前の展示会場内は、雑な展示方法や受付で弁当を食べたり、空き小間が結構目立ったり展示会の体をなしていなかったと記憶している。今回の会場内は、品が良くなったというか、随分と改善されていた感がある。展示機器については特筆すべきものはないが、破砕(Size reduction)、破砕机(Crushers)、胶体研磨机(colloid mills)、低温研磨机(Cryogenic mills)、球磨机(Ball mills)、实验室研磨机(Laboratory mills)、Impact mills、搅拌研磨机(Stirrer mills)、锤式研磨机(Hammer mills)、切割机(Cutting mills)、筛磨(Screen mills)、钉式磨粉机(Pin mills)、喷射式磨机(Jet mills)、Drum mills、Roller mills、他Mixerの類多数。以上のような機器を扱っている会社が実に多い。 豊富な資源を有する国が要求する技術というところか。

15日午後は、貸切バスで3時間かけて浙江省长兴县へ移動し、炭酸カルシウムを生産している长兴清华粉体材料有限公司を見学する。工場近くに石灰石が豊富な土地を有している。大型の生産設備で粉砕機、コンベア類、手動で給袋しているAMO式袋詰装置（多分）などで構成されている。工場内は、粉塵がわずかながら舞っているが、ある程度5Sが行き届いている。次に見学した工場は、长兴金顶粉体材料有限公司で、やはり炭酸カルシウムを生産。清華大学の技術供与を受けている工場で、言ってみれば大学の大型の研究設備の感があった。ここは生産を停止していた。当日は、长兴县内のホテルに宿泊する。

翌16日は朝早くホテルを出発し、浙江科奥陶业有限公司を見学した。ここはノリタケの技術指導を受けた会社で、セラミックス製品を生産している。粉体計量は、プレス工程で一箇所あったが手計量で処理を行っていた。以上の3件を見学したが、粉砕、分級、焼成、混合などが主力の設備構成であった。自動粉体ハンドリングを導入するには程遠い状況である。また、PM2.5が騒がれている中国内故に、生産環境の改善を政府から求められているとのことであった。

見学を終了し、一路、上海のホテル・上海吉臣酒店へ向かう。到着後、すぐに粉体ハンドリング分科会を開催。大川原会長がコーディネータの代役で挨拶で始まり、清華大学の楊先生の講演に入った。『粉体の操作は、食物を食べることを粉体技術に例えるとおもしろい』、『中国は、粉体の輸出が活発だが質が悪く、価格は1/4程度である。質の向上が急務である』、『粉体の超微粒子、微粒子の定義がなく、しばしば論議の対象となる』、『中国内における粉体の標準化が必要であり、検討の準備に入っている』等々のお話があった。次に中国内粉体関連企業4社の企業・技術紹介に移ったが、中国企業のドタキャンにより3社となった。はじめに東洋ハイテック（上海）、次に炭酸カルシウムを生産している中国企業、最後にアイシン産業（無錫）。予定の時間通りに終了し懇親会に移った。

懇親会では、私が分科会の総評と乾杯の音頭をとった。『先ずもって、清華大学の楊先鋭にお忙しいところ講演いただき感謝申し上げる。上海で分科会を開催することができるとは夢にも思わなかった。村上代表幹事に感謝申し上げると共に、時の移り変わりを感じる。また、若い息吹を感じ取ることができ協会の将来も洋々である。視察・見学は、人脈ネットの拡大が最も重要である』等の挨拶で乾杯。所定の時間が過ぎ和やかなうちに閉会しその後も友好を深める時間を持った。感謝、感謝。

ジャパンパビリオン

展示会場入口

見学先

馬を引く人

収穫が終わった
トウモロコシ畑

17日から、友人・謝寧氏の案内で、彼の故郷である瀋陽に移動する。謝氏の父上が経営する照明機器製造工場を見学した後、父上、謝氏の奥さん、娘さんと夕食を共にする。娘さんは、来年4月には日本に留学する予定のようだ。息子さんは既に日本の大学に留学中である。将来は皆、日本に住みたいという親日家である。

翌日は、謝氏の奥さんの実家に行く。車で3時間離れた全くの田舎という。謝氏は「中国で運転するのは怖い」というので、奥さんが運転する車で移動した。父上は留守番。いやはや本当に田舎である。住民は30人位という小さな村である。一面、見渡す限り“とうもろこし畑”。とうもろこしが住民の主な収入源という。奥さんの実家に案内される。大歓迎であり、とても純朴なご両親だ。いっぺんに私も打ち解けてしまった。電話は2年前、携帯は1年前に入手。トイレはない。お風呂もない。冬は－30℃となる厳寒の日でありながら、かまどを炊く熱で暖かいそうだ。厚い布団も不要。人もとても温かい。先日から村の人と作ってくれた料理を出してくれた。とうもろこしで作ったお酒（50度強）も出してくれた。料理には少し手を出したくらいだが、お酒は旨くておかわりを数杯所望した。これは最高に美味しい料理だと言って出してくれた養殖のカエルには参ってしまった。謝氏も苦手なようだ。ご両親曰く、都会には出たくないここが一番いい。近所の人たちもいい人で、助け合って生きていると。3時間ほどの滞在だったが、本当にそうなのだと思う。田舎の人はここが天国なのだ。自然に溶け込み穏やかに生活している。因みに年間収入は12,000元、支出は年間3,600元とのこと。でもとても幸福なのである。村に外国人が来たのも私が初めてだそうだ。だから近所の皆さんは私に会いに来たかったようだが混乱するといけないからとご両親は断ったそうだ。

日中の政情は誠に不安定な中での今回の旅。いろいろ考えさせられました。随分と長く稚拙な文章になってしまったがお許し願いたい。まだまだ紹介したいことがあるが紙面の関係でこの辺で。

なお最後になってしまったが、去る10月2日に営業開発室の萩原部長が逝去された。彼は私より8年ほど入社が早く、同い年ということもあり非常に良く指導してもらった。痛恨の極みであり、心からご冥福をお祈りしたい。合掌

社長　赤堀肇紀

ROOTS 当社のルーツ

本誌で通算150号を数える社内報、今回はそのルーツについて書いてみたいと思います。

社内報の創刊は17年前の1996年9月17日、『赤武エンジニュース』の名称にてスタートしました。

創刊の経緯については、創刊号の中で先代社長が述べられておりましたので、それを引用しますと、「社内報を発行することについては、随分前から考えの中にあったが、社員諸君が盛り上げていく雰囲気が出てこないと、せっかくのものが成功しないと思っていた」「今回、社長の指示・発言でなく、社員諸君が自分たちで各々の協賛を得て発刊の運びとなったことを嬉しく思う」とあるように、社員たちの中から発刊の雰囲気が生まれての創刊だったようですね。

また先代社長は、「この社内報が、社内の様子や、社員諸君の家庭の消息の交換などあって、これが親睦の協和音となり、明るい会社作りに役立つことを念願します」とも述べられており、社内報が社員間の良きコミュニケーションツールとなることに期待を寄せていたことが伺えます。

赤武エンジニュースは、総務の山本部長が1人で作成しており、2004年5月発行の第93号まで、実に8年間続きました。（しかも今のように隔月でなく月1回のペースで発刊していたというから驚きです）

2004年7月からは社風一新チームが編集を受け継ぎ、誌名も新たに「●Link“新風”」となり、リニューアルスタートしました。
リニューアル後は、上述の通り発行は隔月となりましたが、印刷をそれまでの白黒からフルカラーにし、写真やイラストを効果的にレイアウトすることで、見栄えがかなり華やかになりました。
また編集は、2006年に社内報編集局が新たに発足し、社風一新チームからバトンタッチしました。
（ちなみに、現編集局員は3代目になります）

こうして今に至る社内報ですが、今後も200号、300号と継続していけるよう、また社内におけるコミュニケーションの潤滑剤となるよう頑張っていきますので、ご愛読の程よろしくお願い致します。